

「底が突き抜けた」時代の歩き方 271

全体主義の悪夢が栄えた時代の中で生き抜くこと

－ 映画『イースト／ウエスト 遙かなる祖国』

全体主義国家の中で生き抜くことを深く問いかけた映画を最近、立て続けに観た。一本はレジス・ヴァルニエ監督の『イースト／ウエスト 遙かなる祖国』である。第二次世界大戦が終結した翌46年の6月から、悪夢が始まる。

西側に亡命していたロシア人にスターリンの恩赦によって、帰国が促される。ソ連の戦後復興に参加を、というスターリンの呼びかけに応じて、祖国への郷愁に駆られた多くの人々がソヴィエト行きの客船に乗り込んだ。フランスに亡命していた中年のロシア人医師アレクセイ（オレグ・メンシコフ、最近の映画では『コーカサスの虜』『シベリアの理髪師』に出演）もその一人で、彼はフランス人の妻マリー（サンドリーヌ・ボネール、『仕立て屋の恋』のヒロイン）と幼い息子セルゲイを連れて帰国した。しかし、オデッサ港に着くと、軍人たちが厳重に警備しており、下船した家族たちは理由なく引き裂かれ、逆らった一人の青年は容赦なく射殺されてしまう。亡命という裏切り行為に対する報復が開始されたのだ。妻は西側スパイの容疑をかけられて暴行されるが、西側からの帰国者を待ち受けている処刑が強制収容所送りの運命を一家が免れたのは、優秀な医師であるアレクセイをソ連政府が西側に対するプロパガンダとして利用できると判断したからだった。

一家は5世帯が暮らすキエフの共同住宅に住むことを強制され、アレクセイは製糸工場の診療所医師の仕事を与えられる。どこにも逃げ場のなくなった一家は、しだいに亀裂をみせ始める。アレクセイはソ連社会に順応し、共産党員にまでなるが、フランスに帰国することを諦めないマリーは夫の制止を振り切って、ソ連を訪れたフランスの舞台女優（カトリーヌ・ドヌーヴ）に密かに助けを求める。両親と祖母を国家権力によって相次いで処刑された、同じアパートの住人で片言の仏語が話せるロシア人の青年サーシャは、自分もソ連から逃げたいとマリーに打ち明ける。夫婦の溝が広がっていく中で、アレクセイは女管理人と浮気をし、夫の裏切りを知ったマリーは一人ぼっちのサーシャと心を寄せていき、有望な水泳選手であるサーシャとマリーは脱出を計画する。

先に脱出を決行するサーシャは、「フランスに着いたら、あなたを助け出す」とマリーに告げ、西側の貨物船が待つ夜の海を6時間かけて泳いでいく。脱出に成功したサーシャは先の舞台女優の尽力で、カナダに亡命するが、サーシャの亡命を知った秘密警察は、マリーをスパイとして国家反逆罪の容疑で、強制収容所送りにする。6年後、収容所から釈放されたマリーは、精神的にも肉体的にも深い傷を負って変わり果てており、

「愛は終わったわ」と呟くマリーを、「僕たちに終わりはない、心から愛している」とアレクセイは抱きしめる。二年後、共産党の幹部となったアレクセイはマリーとセルゲイを連れて、ブルガリアのソフィアを訪れていた。ブルガリアのフランス大使館でマリーたちの亡命の手配を済ませていた舞台女優が、素知らぬ振りをしてアレクセイたちの座席と離れた座席に腰をかける。

アレクセイは妻子を国外に脱出させるために、体制に順応する姿勢を取り続け、その機会を窺ってきたことをマリーに打ち明け、その機会がいま訪れたと舞台女優に妻子を託する。突然の出来事と、自分を犠牲にした夫の無償の愛の深さにマリーは一瞬戸惑うが、「行くんだ、必ず会える、約束する」というアレクセイの言葉を信じて、マリーとセルゲイは舞台女優に誘われ、追っ手の追及を間一髪のところかわして、フランス大使館に駆け込み、救出される。一家がソ連にやってきた10年後の56年の出来事であり、アレクセイがフランスにいるマリーと再会することができたのは、それから35年後の、ソ連共産党が解体した91年であった。

『イースト／ウエスト 遙かなる祖国』という映画の題名は、なかなか意味深長である。ソ連へやってきたフランス人のマリーにとっては、本国フランスはもしかすると二度と土を踏むことができないかもしれない「遙かなる祖国」であっただろうし、他方二度と土を踏むことがないかもしれないと思ったソ連に帰ってきたアレクセイにとっても、全体主義国家へのあまりもの変貌ぶりに「遙かなる祖国」を感じ取らねばならなかったにちがいない。この映画を観て奇妙に思われるのは、祖国再建の名目でわざわざ亡命ロシア人に帰国を促しておきながら、帰国者を反革命分子、西側のスパイ扱いをして、処刑や流刑の仕打ちを行っていることである。その事情について、「イストリア」誌ジャーナリストのレミ・コッフェールが映画パンフにこう記している。

《ソ連は1941年から45年にかけての“大祖国戦争（第2次世界大戦）”によって、かつてないほどの勢いで勝利を得た。そしてその直後、スターリンは弾圧組織の再構成に着手することを決意する。というのも、これまで直面することのなかった“反革命者”の流入に対応しなくてはならなくなったからだ。それはドイツで捕虜となった150万人の軍人と250万人の民間人からなるロシア人、ドイツで戦った“ヴラソヴィスト”と呼ばれる15万人の兵士たち、20万人のウクライナ人を含めた“ごろつき、民族主義者のメンバー”。そして、自らの意志で“母なる祖国”へ戻ってきた亡命ロシア人たちである。

さまざまな経路を経て、フランスから祖国に到着した亡命ロシア人たちは、スターリンの言う“特赦”が、46年6月14日にソ連邦の最高会議が正式決定した恩赦であることを信じて疑わず、実は彼らが張りめぐらした巧妙な罠であるなんてことは思ってもみなかった。それゆえ、彼らは帰還の旅の道中、G Iや“トミー（イギリス兵の意）”、フランス人までもが惜しげもなく与えた、さまざまな警告を無視したのである。実際、オーストリアのどの駅でも「慎重に、もう一度考え直すように」と拡声器で呼びかけてい

たのだが、その言葉が彼らの耳に入ることはなかったのだ。

それ以前に有罪の判決を受けていた“白い亡命者（ロシア革命に反対する亡命者）”は収容所送りとなるか、流刑を受けるかのどちらかだったが、それは1926年に刑法第35条として定められた「シシルカ法」（国が定めた別な地域への強制移住を決めた法）を受けての判決であった。彼らには“自発的流刑”と呼ばれる法手続きが適用された。この特定の地方への住居の割り当ては、政治警察による秘密の指示によって一方的に決められ、しかも抑留が無期限だった。それにもかかわらず“自発的”と呼ばれるのは、犠牲者が「まったく自由にこの町、この地方に住むことを選びました」という書類に、強制的に署名させられたからである。そして、ひとたびその地に落ち着くや、“国内用パスポート”なしには、どこへ旅行することも許されなかった。そのパスポートを入手するためには、お役所での厳しい検査を受けなくてはならず、それも雀の涙ほどの数しか発行されることはなかった。そして“白い亡命者”の配偶者は、たとえ外国人であっても、彼らの同類と見なされたのだった。（中略）

これらの処置に対して、1946年、クグロフ将軍の指揮下で、「保安中枢部」組織が改定された。しかし実際には、スターリンの信頼を得ることのできた、数少ない人間のひとりであるベリアがグラグ（労働による再教育施設総務局、いわゆる収容所）を含む、弾圧のために働く機関、そのすべての采配を振っていた。全国くまなく張りめぐらされたこの“政府機関”つまり収容所は、クズミッチ＝ボグダノフ将軍の配下に置かれ、250万人におよぶ拘留者を“凍りつかせた”のだった。その拘留者の半数は政治犯であり、5人に1人は女性であった。1935年4月7日と1940年12月10日に制定された法律では、適用年齢を14歳から12歳へと引き下げることによって、子供たちをもその餌食となるよう、改定したのである。

1953年3月、スターリンの死によって、ベリアは120万人の囚人に最初の特赦を決定した。が、その全員が普通犯だった。権力抗争の一環から、ニキータ・フルシチョフがその適用をさらに政治犯にまで広げ、54年から57年の間に、40万人が収容所から解放された。60年代以降、収容所の政治犯は、300万人弱という拘留者総数に対して、“わずか”数千人にすぎなくなったのである。》

『インドシナ』『フランスの女』の映画でも知られるレジス監督は、亡命ロシア人たちがモスクワへ帰ろうと決めたことについて、インタビュー（映画パンフ収録）で、《彼らの亡命の苦しみや、自分のルーツから切り離されて遠くで生きることの辛さを、思いや》りながら、第二次大戦後のソ連の状況に対する認識に触れている。《戦争直後には、ソ連への帰国のリスクは、かつてないほど少なく見えたということも理解しておいた方がいいと思います。あの戦争はヨーロッパにあまりのカオスと荒廃をもたらしました。それゆえ人々は、異なった思想や考えさえも、交流しあうに違いないと思い込めたのです。彼らは、口々にこう言いあいました。“37年、38年のスターリンの恐怖政治はもちろん聞いて知っている。けれど、祖国を守るために2000万の人間が死んだ今こ

そ、当然、改革が、開かれた精神が必要になる。もし新たなロシアを作り上げようとするなら、彼らを民主主義へ導き、そして共産主義に影響を及ぼすときは、今をおいてない。だからこそ、故郷へ戻らなければいけないのだ」と。そういう意味では、彼らは真の理想主義者だったのです。》

一度祖国を見捨てた（註 - 本当は「祖国を見捨てた」のではなく、全体主義化していく祖国に裏切られたという思いをもちつづけていたにちがいない）ロシア人たちが帰国を決意するそこには、並々ならぬ改革への意志が満ちあふれていたことは容易に想像できる。ソ連の外へ出て西側の自由な空気を吸った人々がUターンするのであれば、西側の良さをいくらかでも広めて、祖国を風通しよくしようという思いに駆られるのは当然であった。しかし、ソ連の改革によって自分たちの失脚につながることを恐れるスターリンらの指導部からすれば、帰国ロシア人たちのそのような熱い思いこそが隔離されなければならない危険思想であった。帰国者数について、監督はインタビューでこう続ける。《正確な数字は、K G Bの資料を調べないと判らないのですが、閲覧することはできません。フランスから移住した人たちに関しては、3 0 0 0 ~ 1 2 0 0 0 人で数字が揺れてます。しかしソ連に帰国した人たちが、予想以上に多かったことだけは明らかです。それゆえ、ソ連の指導部の間でこういった脅迫的な妄想が広がりました。“こんなに数が多いとは、西側の策略に違いない。厄介なスパイ問題が生じるのは必須だ”。スターリンの考えたことはこうだったのです。とにもかくにも彼らを排除しなければ。裁判なしの処刑、強制収容所送り、それに弾圧のあらゆる手段を使ってという》

前の記述で全体主義国家ソ連が規定する「反革命者」とは、ドイツ捕虜となった軍人や民間人、ドイツで戦った兵士、亡命ロシア人たち、要するに、「ごろつき、民族主義者のメンバー」以外はすべて、戦争であれ、亡命であれ、ソ連の外の空気に触れた者たちである。スターリンは、一度西側の空気を吸った（もしそれを洗脳と呼ぶなら）者たちがもう二度と元に戻らないことを知り抜いていたのだ。洗脳の効果の恐ろしさは、祖国ソ連で革命を通じて大規模に実験されてきたことだからだ。

亡命ロシア人たちの悲劇の中でも、稀なケースを描いたこの映画はいうまでもなく、その背後に亡命ロシア人のみならず、収容所群島の中で革命の名のもとに密告、裏切り、ごまかし、強奪などのありとあらゆる理不尽な圧制をしいられて堪え忍んできたロシアの民衆の苦難を沈潜させているが、全体主義国家体制として80年近くもの時を人間の精神面に負わせつづけてきた傷痕が当然のことながら、体制崩壊後も少しも軽減されていないことがこの映画の企画段階で浮き彫りにされている。帰国ロシア人の生存者から直接、証言を聞こうとしたが、それは困難であったと監督はインタビューの中でも述べている。《ソ連が崩壊した今も、人々の気質はあまり変わっていません。30年から40年に及ぶソ連の恐怖政治を体験し、生き残った人たちは一種の被害妄想的態度を、今でも崩していないのです。他人に対する信頼感がまったくありません。口を閉ざし、誰も信用しないことに慣れきったのです。特に外国人には気をつける、と。その頃の当事

者を探し出し、インタビューや証言を集めることは、とても難しい作業です。彼らは、自分たちが見たものを口にするのを恐れ、報復に脅えています。ですので、私たちはもっぱら資料をあたりました。》

この映画を準備し、撮影するために、旧ソ連で多くの時間を過ごした監督はインタビューの中で、《共産主義が今もって生きていること》にショックを感じている。《すべての階層に渡って、まだとても強い影響力を残しているのです。ベルリンの壁が落ちてから、10年の歳月が経つというのにですよ。洗脳がどんなものだったかは想像を絶します。最も古い世代のロシア人たちは自問することを好みません。というのも自分たちの人生が歴史の失敗そのものだということを認めたくないからです。逆に私と同じ年代の連中は、共産主義が否定的なユートピアだったことに気づいて野蛮な手段を取りましたが、今では絶望のためにじわじわと消え入ろうとしています。ブルガリアの友人がこう言いました。“我々の脳は破壊され、糞みたいな人生を押しつけられた。けれど、それ以外の人生を選べる力も、他の社会形態で闘えるだけの力も持っていないのだ。我々はまったく歴史に騙された”と。本当に凄まじい話だと思います。『イースト／ウエスト』はこの言語道断の不正に対する気持ちから生まれたものでもあります》

もちろん、フランス人のレジス監督にとって、以上の発言は見聞きしたものであって、自らの身を切られる痛い思いの中から紡ぎ出されたものではない。それでもウエストの側においても、ナチス・ドイツという全体主義国家の悪夢に覆われた一時期を戦前に顕現させていたし、また世界がイーストとウエストの二つに分割された戦後の歴史と無縁ではありえなかったから、レジス監督の発言にはイーストの痛切な思いを共有しようとする覚悟が備わっている。しかしながら、イーストの渦中から引き絞られる言葉とは位相を異にしている。脚本の執筆に参加した『コーカサスの虜』の監督であるロシア人の、レジス監督と同じ48年生まれセルゲイ・ポドロフは、映画パンフ収録のインタビューで、《私たちが共産体制を憎んでいるのは当然のことです。しかし同時に、その制度の中で生きてきたのです。あたかも巨大な監獄の中で生きてきたように》、そんな中で生きていくのにユーモアがどれほど大切であったかを吐露している。

16年間の収容所生活を経て、釈放された友人の作家が語った、《収容所で10年一緒に過ごした奴がいて、再会したときに、もう冗談が言えなくなっていたんだ。まるでいい思い出がひとつとしてなかったみたいだね。あきれるじゃないか》というエピソードについて、《これを語ってくれた友達はそのとき、まったく落胆した様子でした。私はこのエピソードが大好きです。そこにロシア魂が反映していると思う》と語るセルゲイは、《私たちロシア人にとって、共産主義はひとつのコメディなのです。ばかげた、ナンセンスな支配のことです。こうして距離をおいたところで、私たちはスターリンを途方もない茶番劇の操り人形として思い浮かべ、笑い飛ばすことに決めたのです。これは私たちの生きる知恵なのですが、外国人には理解しがたいのでしょう。そんなわけで、私の一番の気遣いはレジスがロシアの魂の中に入り込めるよう、手助けをしたいという

ことだったのです》ともいう。

この映画について語ろうとしながら、どうしても共産主義と呼ばれた全体主義国家ソ連が崩壊するまでの80年近く、どのような悲惨なことが行われ、人々が耐え抜こうとしてきたかということのほうに目が行く。もちろん、帰国ロシア人一家の最後まで諦めなかった脱出劇を描いたこの映画も、ロシア民衆に降りかかった災厄の一つであり、そのたたかいかたも無数のたたかいかたのうちの一つである。だが、この映画の一家にはセルゲイのいうどん底でのユーモアはみられなかった。それは、この一家がまだどん底を味わっていなかったからか、それとも、フランス人の妻にはどん底のユーモアの中でいまを耐えているロシア人の魂がみえてこなかったからか。たぶん脱出の望みを抱いている間は、どん底のユーモアの出番はなかったのであろう。そのユーモアは遙かなる祖国に一人残る覚悟で、妻子を脱出させるための10年間を計画してきたロシア人の夫の心中に渦巻いていたにちがいない。

「共産主義はひとつのコメディ」として笑い飛ばそうとするロシア人の「生きる知恵」の隣で少し囁くなら、ソ連の80年間は歴史の飛び切りのコメディであり、それも対極にある共産主義が全体主義の思い込みとして上演されてきた無類のブラックコメディなのだ。このコメディは舞台のさまざまな登場人物のみならず、ウエスト^{イースト}の観客まで真面目に振り回してきた。脚本の執筆に参加しているフランス人のルイ・ガルデルは、カトリーヌ・ドヌーヴが演じた、脱出の手引きをした舞台女優の特定のモデルについて聞かれて、映画パンフ収録のインタビューで、フランス女優のシモーヌ・シニョレのエピソードを取り上げている。

《シニョレがソ連旅行中、多くの人から逃げ出せるよう、助けてくれと懇願された話は有名です。ショックを受けたシニョレはアラゴン（ルイ。詩人、作家、共産党員でフランス知識人のリーダーだった）に会いに行き、ある反体制分子の妻の悲惨な状況を知らせ、こう言ったのです。“この女性に会ってから、私はもう眠れなくなってしまった”と。それを聞いたアラゴンはこう答えたというのです。“シモーヌ、ぼくはここ20年来、眠っていないのだよ”と。そして結局、彼はまったく何の手だてもうちませんでした》

ルイはヒロインのマリーが6年間収容所に閉じ込められていたシーンをカットした理由について、ロシア側の人たちは、《私たちに何とも凄まじい話をしてくれました。ここでは生き延びるために、女囚が多くの愛人を作り、所長と寝て、仲間を裏切り、まさに“畜生”のように振舞ったというのです。けれど、そう語る彼らには、そんな話はまったく“ありきたり”のようでした。レジスと私は、収容所の再現はそれだけで一本の映画のテーマになり、映画全体のトーンとは調和しないという判断を下した》と語り、そのシーンを書いたセルゲイも、インタビューで答えている。《ロシアでは収容所を描いた映画があまりに多く公開されすぎて、私たちはもう教えてもらうことは何もないという感じなのです。要は、6年間収容所にいて、そこから出てきた女性はまったく別な

人格の人間になっているということを、観客に感じてもらえればいいのであって、それは十分に表現できていると思います。人々が決して取りあげないテーマ、それは収容所後のことです。もう二度と、もとの普通の生活に戻ることが不可能だというのが、この作品のテーマなのです》

何もしなかったそこでの詩人のアラゴンが、「“畜生”のように振舞った」女囚よりも劣ることは疑う余地はない。なぜなら、そのような女囚もまた、収容所生活の中で「全く別な人格の人間」に変わってしまっているという刻印を受けているのに、よく見える観客席で観覧するアラゴンは、なんの刻印も受けずに変わらなくても済まされるからだ。

《青春時代に私を締めつけていた絶望的な気持ちが思い出されます。それがゴルバチョフが権力を握り、初めて自由に自己表現が許されるようになったとき、ロシアの作家や監督たちは長い長い間、心に秘めていたことを外に出したのです。公表されたものはすべて、恐ろしい卑劣な現実を暴きました。私たちは証言をするのに性急でした。なぜなら、いつ新しい政権がつぶれるだろうかと怖れたからです》というセルゲイの言葉を聞くと、全体主義の凶暴な嵐が吹き荒れる中で表現すべき思いを深く沈澱させながら耐え抜き、機会さえあればいつでも噴出させる態勢を整えてきているロシアの作家たちに圧倒されると同時に、書くこと、描くこと、映像化すること等のあらゆる表現行為は時代が全体主義かどうかにかかわらず、人間を深く覆い尽くしている闇の底に突き入ることを願っているのが感じ取れる。

『イースト／ウエスト』という映画は、政治や経済体制や、まして地域的な区分などである筈もなく、人々がかかえこんでいる闇の大きさ、あるいは人々が闇にかかえこまれている大きさによって識別されるにすぎない濃淡を描いてみせたのだという気がする。たかだか体制の崩壊によって、人々の心の中に巣くっている広大な闇がいくらかなりとも晴れるものではありえないことは、《映画にとって幸せだったのは、共同製作の契約が経済危機のまさに直前に交わされたことです。現在の状況は一年前より悪くなっています。現在では、外国のどんな映画製作会社もロシアには一銭たりとも投資しようとは思わないでしょう。今だったら、レジスはこの映画を撮ることはできなかったに違いありません。たぶん『イースト／ウエスト』はロシアで撮ったフランス人監督の最後の作品として映画史に残ることになるのではないのでしょうか》とセルゲイが語っているところにも、その一端を見出すことができるだろう。

2002年1月7日記